

ウガンダ東部における言語状況の研究

—ケニィ語の成立過程を中心として—

平成 22 年入学

参加したフィールドスクール：ナミビアフィールドスクール

調査地(調査国)：ウガンダ

キーワード：アパルトヘイト、ケニィ語、言語状況、社会言語学

研究テーマについて

本研究の目的はケニィ語という言語を通してのウガンダ東部の言語状況の解明である。ケニィ語(Lukenyi)はバンツー諸語の東部湖畔グループ(Guthrie の分類で言うところの J10)に属する言語である。この言語の話者であるケニィ人はもともとガンダ人の人間で、ジュンジュ王(Kabaka Junju)の時代に、当王を遊業中に暗殺した嫌疑をかけられガンダ王国を脱出せざるをえなくなった人々の子孫であるという。疑問となるのは彼らの言語の形態である。彼らの出自はガンダ人であるにもかかわらず、ソガ語に酷似している。ガンダ語とソガ語は同じ東部湖畔グループに属する言語だが、やはり別言語というべき面を持っている。研究テーマの一つはケニィ語には出自の分からない単語が多く存在することである。例えばガンダ語では「魚」のことを *ekyennyanja* と言うがソガ語ラモジ方言においては *émperé* となる。それにも拘らずケニィ語に於いては「魚」は *ekitóte* と表現する。このような単語は何処から来たのであろうか。また、何故彼らは移住先の言語に完全には同化しなかったのであろうかということも疑問である。先述のようにケニィ語はソガ語、特にそのラモジ方言と酷似している。それにもかかわらずケニィ語はラモジ方言と区別されていた。これらの疑問に答えることが研究課題である。



(図 1. 調査地の Nawampiti 村)



(図 2. 調査村は典型的な漁村である)



(図 3. 魚は民族によって様々な名で呼ばれる)

フィールドスクールから得られた知見について

ナミビアフィールドスクールはアパルトヘイトという人種差別的な政策化での言語状況がいかなるものかについて多くの知見を得られるものであった。ナミビアにおいて印象深かったことはまず英米に植民地化されなかったにもかかわらず、公用語に英語を採用していたことであった。植民地支配の象徴であるアフリカンス語を公用語の地位から降ろす一方で、世界の中で支配的な地位を占める英語を公用語の座につけるといのは奇妙なように感じた。しかしそれは日本人である私にとっての感覚なのかもしれないとも考えた。少なからぬ日本人にとって英語は借用を通じて日本語を乱れさせかねない言語であり、また太平洋戦争後に日本を占領した国の言語でもある。一方でナミビア人にとってアフリカンス語は残酷なアパルトヘイトを行った民族の言語であり、同時代を通じて使用を強制された言語でもある。しかし、だとすればある言語が植民地主義的・帝国主義的だというのは国籍・民族ごとに、更には個人ごとに違うということになる。当人達にとっては辛い思い出を呼びさます言語なのだから当然公用語に採用することは避けるべきだという考えと、それは気のせいなのだから客観的に見て有用な言語を公用語に採用すべきだという考えの両方が成り立ちうるように思われる。立場によって植民地主義的な言語は変わるのではないか、というのが私がフィールドスクールで得た知見である。

フィールドスクールで得たことをどのように研究に生かせるか

ナミビアとウガンダは多くの類似点を有すると共に相違点も有する。類似点としては例えば、アパルトヘイトとは広義の植民地支配の一種であるし、ともに貧困やエイズ、内戦の傷跡、南北の格差などに悩まされている点が挙げられる。相違点としてはその貧困の度合いやエイズの感染率が違うこと、気候や実際の民族分布などが挙げられる。ナミビアとウガンダという二国は対比が比較的しやすいといえる。例えば携帯電話使用時における言語の対比をする事が興味深いだろう。両国とも携帯電話の使用が盛んだが、ウガンダよりナミビアにおける方が通話中に民族語を使用することが好まれていたような印象を受けた。これはナミビア政府が多言語主義を打ち出していることが影響を与えている可能性もある。このようにナミビアと調査地の対比が研究に生かせると思われる。